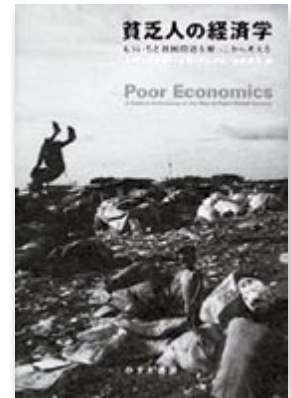


『貧乏人の経済学—もういちど貧困問題を根っこから考える—』

アビジット・V・バナジー／エスター・デュフロ著・
山形浩生 訳

農業・農村領域 主任研究官 若林 剛志



二項対立とその妥協点を探る。この手の本のおさまりの構成なのですが、本書はそれだけの軽薄な本とは異なります。結論へと導く記述の背景には、多くの研究者による多くの頑健な研究成果が控えているからです。

本書は、既に関係経済学の権威の一人となっているBanerjeeと、新進気鋭の研究者であるDufloによって、世界へ向けて上梓されました。題にある「経済学」の知識はほとんど必要としませんので、既に読破された方も多いのではないのでしょうか。

そんな有名な本をわざわざここでとりあげるのは、ただ良い本を紹介したいという個人的願望に加え、本書を読み進める際の評者なりの留意点を少しばかり書き記しておきたいと考えたからです。

著者は、貧乏人の行動や意思決定を知るために現地調査を行い、貧困と戦うための接近法としてランダム化対照試験を利用します。「細部」に目を凝らして原因を究明した上での具体的な実施方法を示す処方箋が、効能を決定づけると論じます。ちなみに、ランダム化対照試験とは臨床試験のことだと考えればわかりやすいでしょう。

各章のトピックは、開発経済学で取り上げられる多様な内容を包含しています。例えば、なぜ農民は肥料購入代を貯めておかないのか、なぜ子に予防接種を受けさせないのか。本書によれば、その理由のひとつとして現在と将来では全く異なった考え方をする時間的不整合があるといえます。

本書は、政策につきものである効果的なターゲティングの一手法を紹介した作品と位置づけることもできそうです。ターゲティングとは、目的を最大限に達成すべく、対象を絞り込んで何か（例えば助成）を実施することです。本書に直接その言葉は出現しませんが、上述した本書の接近法は、ターゲティングの考え方に類似しています。

ところで、本書を読んでいると、読者が正しく判断するための材料やこれまでの知見が十分に説明されていない部分があるように思えます。例えば、論点を絞り込み、「細部」に焦点を当てるあまり、農

業の生産性上昇とそれに伴って生じる他産業への労働移動が、経済発展と貧困削減に寄与してきたことが、なおざりにされている感があるのです。

このような懸念を抱いているのは評者だけではありません。本書の中で複数の論文が引用されているRosenzweigと世界銀行のエコノミストであるRavallionが、Journal of Economic Literatureに本書の書評を執筆しています。両人とも第一線で活躍する開発経済学者です。前者は、ちょっとした変化が大きな影響を与えることを強調するあまり、前提となる構造問題（例えば多くが小農であること）を忘れがちなこと、後者はランダム化対照試験を強調するあまり、この手法の採用理由やメリットデメリットについての記述が不十分であり、誤解を招く恐れがあること等に触れています。評者も同感です。本書が一部の専門家向けに著されているならいざ知らず、世界中の多くの人々に読んでもらうことを目的に執筆されていることを鑑みれば、提供されている情報が十分でない恐れがあります。

そこで、もし機会があれば、本書とあわせて両人の書評に目を通すことを勧めます。これにより、本書の価値をますます正しく評価することができるのではないかと評者は考えています。

さて、少し批判的に記した部分もありますが、それらは本書の価値を損なうものではありません。それどころか、開発経済学の理論にとどまらず、実証にも造詣が深い著者ならではの密度の濃い良書だとの認識を深めています。評者が注意喚起したのは、本書の記述を鵜呑みにしないことであって、勧めたいのは、貧困の問題を多角的に見つめ、考えるための出発点として本書を読むことです。そして、読者が、この問題を深く考えた末に再び本書に立ち返り、「細部」を見過ごすことなく本書を吟味するなら、それは著者にとって願ってもないことでしょう。